

広がる「手元供養」

遺骨や遺灰を自宅に置く「手元供養」が広がっている。ペンダントやミニ骨つぼなどの手元供養品の種類が増え、骨つぼを入れられる家具タイプも登場。葬送などの在り方が多様化し、より身近なところで故人をしのびたい人の気持ちの後押ししている。

遺骨をそばに悲しみ癒やす



「手元供養は心の交流なんです」と語る手元供養協会の山崎譲二会長。オブジェには納骨袋に入れてから収納する＝京都市中京区

東京都大田区の古浜貴美さん(30)は、4年前に54歳の若さで亡くなった母親の遺骨を自宅のリビングルームに置いて供養している。「古浜家の墓にはまだ父方の祖父しか入っていない。山梨にあるので年に1、2回しか行けない。そばに置きたい」と父の意向もあらわした。

母親も生前、墓にはこだわらず、海に散骨してほしいと古浜さんに話していたという。永代供養墓などを検討したが、「マンション形式の納骨堂は機械的な感じがしたし、他人と一緒にいるのもかわいそう。それなら家で供養したい」と考え、1年前に骨つぼが入る仏壇風の家具を購入した。

横浜市都筑区のオーダー家具会社「トータルリビング ユウキ」が「手元供養家具」と名付けて販売しているもので、白木のシンパルなデザインが洋風のリビングルームにも合う。同じ素材でお供え用の台も特注した。「母はよくリビングにいたので、そばに感じる感じがします」と古浜さん。

2005年に発足したNPO法人「手元供養協会」(京都市)の山崎譲二会長によると、手元供養品には、墓の代わりということと、大切な人を失った悲しみを癒やすグリーフケアの役割がある。「身に着けるものはグリーンケアに重きを置いたもので、部屋置き型はお墓の代わり。最近はお骨

の継承が難しくなっている現代。永代供養墓、散骨、樹木葬などの新しい葬送の形が広がるとともに、遺骨や遺灰を取めるペンダントやミニ骨つぼなどの手元供養品が市販されるようになった。同協会は普及のため、さまざまなタイプの手元供養品を展示会などに貸し出している。「お骨は写真や形見とは違う、故人そのもの。そばで守ってくれる感覚が強い」と山崎さんは話している。

「手元供養家具」の問い合わせは「トータルリビング ユウキ」 ☎045・941・9235、手元供養協会 ☎257・78388

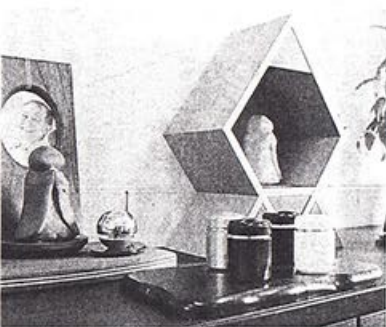
会の問い合わせは ☎075・257・78388



骨つぼを入れられる仏壇風の供養家具。「お墓が見つかるまで、これで保管しておくという方もいます」と話す「トータルリビング ユウキ」の小原御郎社長

「手元供養家具」は7年前、取引先の建設会社社長から「家の中に置く墓を開発してほしい」と依頼され、商品化。メディアで取り上げられると、問い合わせが殺到した。「何らかの事情で遺骨を家に置いている人がたくさんいて、『これで救われました』と言われました。特に子どもを亡くした方は、お墓に入れられないんですね」と小原御郎社長。核家族化、少子化で家墓

核家族化で墓の継承難しく



④ミニ骨つぼは墓の代わりに⑤ペンダントやオブジェなどさまざまなタイプの手元供養品

横浜市都筑区

核家族化、少子化で家墓

骨つぼを入れられる仏壇風の供養家具。「お墓が見つかるまで、これで保管しておくという方もいます」と話す「トータルリビング ユウキ」の小原御郎社長

核家族化、少子化で家墓